

【事業実績】

[事業概要]

舞鶴引揚記念館が収蔵する世界記憶遺産登録資料「舞鶴への生還 1945-1956 シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」を活用し、歴史を共有する国内の都市と協力した巡回展を開催することにより、各地域の歴史文化の掘り起こし及び地域の歴史の継承につなげる。

また、グローバルな視点で国際平和を願う歴史文化の交流・発信の拠点として、ICOM(国際博物館会議)京都大会の開催を活かした世界の博物館関係者とのネットワークの構築、ウズベキスタン大使館や日本人抑留資料館等関係者と連携した情報発信、海外の研究者と協働した学術調査(中国・葫蘆島市・瀋陽市等)、館内展示解説の多言語化による国際発信など、世界に向けた情報発信、海外関係者との交流・連携の強化を図る。

1 国際ブランド推進事業のための各種行事の開催

(1) 引揚関係都市等との連携による共同企画展の開催

世界的にも類を見ない引揚事業において、引揚者を受け入れた引揚援護局開設地及び引揚港としてその役割を果たした長門市(仙崎港)におきまして、開催市及び関係団体との共催を受け、薄れゆく引き揚げの歴史と平和の願いを国内外に発信する全国巡回展を開催した。

この巡回展では、開催地及び周辺市町の住民に忘れかけていた「引き揚げの歴史」や「平和への願い」を思い起こさせ、来場者は、「シベリアでの悲惨な様子がわかる。仙崎港にも約41万人が引き揚げた歴史がある。改めて平和の尊さを知るためにも若い人をはじめ、多くの方に見てほしい」と話すなど、次世代への継承の大切さを発信するとともに地域の歴史・文化の掘り起こしに繋げることができた。

(開催地及び開催期間)

仙崎展(長門市): 山口県立劇場「ルネッサながと」

文化情報ギャラリー

令和元年11月22日から12月1日(10日間)

来場者数: 1,013人



仙崎展・会場の様子

(2) 世界記憶遺産国際ブランドプロモーションの実施

引揚関係都市との連携による全国巡回展、「シベリア抑留と引き揚げ」に関する展示に加え、旧ソ連領で抑留地のひとつだったウズベキスタンでの抑留がきっかけとなり、2020年に開催される東京オリンピックの選手団を受け入れるホストタウンに繋がり、交流が育まれている様子や取り組みの経過がわかる特別企画展『舞鶴引揚記念館ウズベキスタン展「抑留から交流へ」』in 東京・大阪の開催にあたっては、薄れゆく引き揚げの歴史・抑留が交流につながった取り組み・平和への願いを国内外に発信する「世界記憶遺産国際ブランドプロモーション事業」を実施した。

(実施内容)

引揚関係都市との連携による全国巡回展にあわせ、来場者には学芸員による展示説明、開催市のコミュニティFM放送、新聞社やテレビ等のメディアによる広報及び山口県内の公共施設を活用したポスターの掲示やチラシの配布等を行った。



学芸員によるプレス発信や展示解説

また、舞鶴引揚記念館ウズベキスタン展「抑留から交流へ」の大阪展の開催時には、イベント主催者(ツーリズムEXPO)による関西圏域のメディア向け広報やホームページ、東京展(KITE会場⇒新型コロナウイルス感染拡大防止により、3月11日に中止)の開催については、舞鶴市長による東京記者会見(令和2年2月20日・マイナビ ノウラボ セミナールーム・人形町)によるプレス発表や中央大学展の開催時には大学の広報やホームページにより広く国内外に情報発信した。

(3) ICOM(国際博物館会議)京都大会における世界の博物館関係者との情報交換の実施

2019年9月に京都市で開催された世界の博物館関係者が参加するICOM(国際博物館会議)京都大会に舞鶴市長をはじめ、引揚記念館長や学芸員が参加し、「文化をつなぐミュージアム-伝統を未来へ-」をテーマに博物館を取り巻く課題や地域において博物館が果たす役割について議論し、世界の博物館関係者と意見交換することができた。

大会に合わせて実施されたエクスカージョンでは、ドイツの博物館関係者が舞鶴引揚記念館にも訪問され、「祖父がロシアで抑留されて死にました。自分の家族の歴史と似ているので、心が痛みます」と感想を述べられた。

オランダの世界記憶遺産資料「アンネフランクの日記」収蔵博物館関係者も来館され、交流することができるなど、国内外の研究者、専門機関とのネット



ワーク化の構築を推進する活動に繋がられた。



エクスカーション・抑留体験者の講話



海外博物館関係者と抑留体験者

ICOM 京都大会 2019

(4) 国際的な学術交流推進事業の実施

「引揚事業」及び「シベリア抑留」に対する関心・理解度・認知度が向上し、国内・外でのブランド化が図れ、薄れゆく引き揚げの歴史と平和への願いを広く世界に情報発信することができた。

① ウズベキスタン大使館・抑留関連博物館（タシケント市）等、関係機関と連携した特別展の開催

「シベリア抑留」と「引揚事業」に関する資料のユネスコ世界記憶遺産登録を契機として、薄れゆく引き揚げの歴史と平和の願いを国内外に発信する特別企画展を開催する。

また、2020に開催される東京オリンピックにおいて、舞鶴市は、ウズベキスタンの柔道およびレスリングの選手団の事前合宿を受け入れるホストタウンとなっている。旧ソ連領で抑留地のひとつだったウズベキスタンでの抑留に焦点をあて、70年以上の時を経て、抑留の歴史が国際的なスポーツと平和の祭典につながった軌跡を全国に情報発信する。

●特別企画展『舞鶴引揚記念館「ウズベキスタン抑留から交流へ」 in 大阪・東京』の開催
(開催地及び開催期間)

1. 大阪展：インテックス大阪3号館（大阪市住之江区）
令和元年10月24日から10月27日（4日間）
来場者数：1,900人



大阪展示会場

2. 東京展：
 - ①中央大学多摩キャンパス中央図書館1階ホール
(東京都八王子市)
令和元年10月3日から10月10日（8日間）
来場者数：141人（来場者名簿記入者のみ）



東京（中央大学）展示会場



中央大学文学部・学生への特別講義

②東京シティアイ K I T T E（地下1階）イベントスペース

令和2年3月20日から3月24日（5日間）

※新型コロナウイルス感染拡大防止により中止（令和2年3月11日決定）

●海外企画展『舞鶴引揚記念館「ウズベキスタン抑留から交流へ」 inタシケント』の開催

平成29年度から交流・連携を開始したウズベキスタン・タシケント市にある「日本人抑留者資料館」において、日本人が残した抑留に関する史実を現地の方々に知ってもらい、恒久平和の願いを発信することを目的とした海外企画展を開催した。

現地への訪問時には、「ジャリル・スルタノフ館長が日本人抑留の史実を現地の方々に伝えようという熱意に感銘を受けた。館長をはじめ、ウズベキスタン国民に日本人抑留者が残した史実を多くの方に知ってもらいたい」と伝えた。

また、来場者は、「ウズベキスタンと舞鶴が一緒になって、戦争のない平和な世界を作しましょう」と話されていた。

スルタノフ館長からは、「引揚記念館と連携して、引き揚げ及び



抑留の史実を継承し、戦争のない平和な世界を願う、また日本人抑留者が帰国した時の喜びや嬉しさ等様々な感情を映画（現在、日本人抑留者ドキュメンタリー映像「ひいらぎ」の2作目を制作中とのこと）で伝えていきたい」と語った。

日本人抑留者資料館展示会場
ジャリル・スルタノフ館長（右）の解説

さらに、今回の訪問では、日本人抑留者が建設に携わった「ナボイ劇場」を視察し見聞・知識を深めたこと、タシケント市とコーカンド市にある日本人墓地を参拝できたこと、墓地の管理者である現地の方に感謝の意を伝えることができたことは成果となった。

（開催地及び開催期間）

・開催地：日本人抑留者資料館（「1940年代にウズベキスタンで生活していた日本人の記録」資料館）
（ウズベキスタン・タシケント市ヤッカサライ区）

・開催期間：令和2年（2019年）8月11日から9月10日（31日間）

② 中国・瀋陽市における引揚等に関する現地資料調査の実施

中国・瀋陽市において「中国東北部（旧満州）からの引き揚げ」に関連する研究者を擁する遼寧省社会科学院との情報交換及び現地の地誌等の学術調査を実施した。

在瀋陽日本総領事館において、今回の資料調査が日中関係に裨益するものであるとの理解が得られたこと、遼寧省社会科学院の「日本人の引き揚げ」に関する中国随一の専門家であり「葫蘆島からの引き揚げ」をめぐる著書を執筆されている姜研究員や「満蒙開拓団」の専門家・孟研究員等をはじめ他4名の研究者と学術交流ができたこと、また、人的交流では、王希奇氏と妻の王秋菊氏との絆を強固なものとしたことは成果であり、今後の葫蘆島市や瀋陽市等における資料調査や研究者との橋渡しなど、調査・交流活動を継続する上での有益な協力関係の第1歩として位置づけられる。

総括的には、世界記憶遺産資料が登録されて4年が経過し、引揚記念館への来館者数は伸び悩みの状態であるが、来館者を増やしていくために必要なことの1つとしては、展示内容の充実がある。このためにも海外資料調査は必要であり、国内外での資料調査と最新の学術的成果とを展示内容にいかにか生かしていくか重要であることを認識できたことが成果である。

【瀋陽市 海外引揚関連調査】

実施期間：令和元年11月26日から11月29日（5日間）

訪問場所：26日 在瀋陽日本総領事館、27日 東北大学、瀋陽故宮博物館
28日 遼寧省社会科学院 ほか

派遣者：舞鶴市世界記憶遺産保存活用推進委員会

黒沢文貴（東京女子大学教授・舞鶴引揚記念館事業有識者会議会長）

山下美晴（舞鶴引揚記念館長）

長嶺 睦（舞鶴引揚記念館学芸員）

小島 宏（舞鶴市みなと振興・国際交流課長）

曲 振波（舞鶴市みなと振興・国際交流課 国際交流員）



遼寧省社会科学院との学術交流会議
（令和元年11月28日）



葫蘆島市からの日本人引揚に関する
調査研究書（図書）

（5）海外の研究者や博物館関係者等への情報発信

①地域のグローバル拠点としての博物館を目指した館内展示解説の多言語化（英語・中国語・韓国語）を図り、外国人にわかりやすい情報発信に取り組むことができた。

●館内展示解説用タッチパネルシステム（5台）：中国語（簡体語）、韓国語の追加



館内展示解説タッチパネル 中国語（簡体語）と韓国語を追加

●エントランス・ガイダンス映像（ナレーション字幕）：英語、中国語（繁体語）の追加



英語字幕 DVD



中国語（繁体語）字幕 DVD

〔成果・効果等〕

国内の連携事業において、引揚港であった山口県長門市（仙崎港）で全国巡回展を開催し、千人を超える多くの方が来場するとともに、開催地の新聞社やFM局等のメディア、公共施設における告知など、プロモーションの実施により、「シベリア抑留と引揚事業」について、開催地のみならず近隣市町等へ広く周知が図られるなど、国内・外における「シベリア抑留」及び「引揚事業」に関する史実の継承並びに平和の発信拠点としての役割が明確化された。

2019年9月に開催された ICOM（国際博物館会議）京都大会には、舞鶴市長をはじめ、引揚記念館長や学芸員が参加し、「地域における博物館が果たす役割」等、世界の博物館関係者と意見交換でき、さらには、世界記憶遺産資料「アンネフランクの日記」収蔵博物館関係者が舞鶴引揚記念館を訪問され海外の博物館等関係機関とのネットワーク化の構築を推進する活動に繋げることができた。

国際的な学術交流事業では、「シベリア抑留と引き揚げ」に関する特別企画展を「大阪」と「東京（10月：中央大会場は開催、3月：東京シティアイ K I T T E 会場は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）」において開催し、次代を担う大学生を含む2千人を超える多世代の方々に第二次世界大戦後の先人の労苦を知ってもらう機会を創出、旧ソ連領で抑留地のひとつだったウズベキスタンでの抑留がきっかけとなり、2020年に開催される東京オリンピックの選手団を受け入れるホストタウンに繋がり、交流が育まれている様子の特別展示も行うなど、70年以上の時を経て、抑留の歴史が国際的なスポーツと平和の祭典につながった軌跡・取組を国内外に広く情報発信することができた。

中国・瀋陽市においては、「中国東北部（旧満州）からの引き揚げ」に関連する研究者を擁する遼寧省社会科学院との情報交換及び現地の地誌等の学術調査を実施し、在瀋陽日本総領事館においては、今回の資料調査が日中関係に裨益するものであるとの理解が得られたこと、遼寧省社会科学院の中国随一の引き揚げに関する専門家4名と学術交流ができたこと、王希奇氏等との絆を強固にできたことは成果であり、今後の葫蘆島市や瀋陽市等における資料調査や研究者との橋渡し等、調査・交流活動を継続する上での有益な協力関係を築けた。

ウズベキスタン・タシケント市にある「日本人抑留者資料館」においては、日本人が残した抑留に関する史実を現地の方々に知ってもらうことを目的とした海外企画展を開催し、今後も連携して恒久平和の願いを発信していくことを確認した。

海外の研究者や博物館関係者等への情報発信事業としては、グローバルな拠点としての博物館を目指して、館内に設置している解説用タッチパネルやガイダンス映像等の多言語化（英語・中国語・韓国語）を図り、外国人にわかりやすい情報発信に取り組むことができた。

以上の事業を実施する中で、「引き揚げやシベリア抑留」に関する史実への関心度・理解度・認知度を深めることにつながり、国内外におけるブランド化を図ることができた。また、引揚記念館を核として、各種関係団体や国内外の研究者、専門機関とのネットワークの構築を推進することで、継続的な事業効果が期待できる。